

試將下列日文文獻譯為中文。(每題25分)。

- 一、臺灣新文學が誕生したのは、1920年代に入ってからである。ここに言う新文學とは、それまでの韻律、形式に拘束された漢詩や文語で書かれた漢文と違って、形式、韻律にとらわれない自由詩や白話(口語)で書かれた小説、散文のことで、その誕生の母胎となったのは、当時東京に学んでいた学生が刊行していた雑誌「臺灣青年」である。

臺灣から東京への留学生は、1908年(明治41年)60名だったのが、1915年(大正4年)には三百余名、1922年(大正11年)には二千四百余名へと急増した。

——(『臺灣抗日小説選』研文出版、1988年、3頁)

- 二、当時の臺灣において、民族問題は、「皇民化」という歪んだ形であらわれた。

五十年にわたる日本の臺灣統治は、一口にいうと、経済的・社会的差別状態を、精神面での一視同仁、日臺同化によって糊塗し、抵抗の牙をぬき、あるいはまるめて、従順なる「皇民」をつくりあげる歴史であったといってもいいであろう。もちろんその間にあって、民族独立の抵抗があったわけではない。臺灣民衆は日本統治の枠内での自治の要求という形もふくめて、ねばり強い闘いを続けた。組織的な運動が弾圧されてのちも、解放の夢が彼らの意識の底をどす黒く洗っていかなかったとはいえないのだ。しかし社会表層ではそれは一掃され、「皇民化」の課題が好むと否とに関係なく、むりやりおしつけられたことは事実である。

——(尾崎秀樹『近代文学の傷痕』岩波書店、1991年、138頁)

三、東アジア諸国・地域は現在大きな岐路に立たされている。それは権威主義的な政治体制からより多元的政治体制への移行、官僚的規制・指令による経済体制から市場重視の経済体制への移行である。端的にいうと、東アジア諸国・地域は民主主義と経済発展をふたつの大きな軸として、体制的な変容を経験している。長い歴史的伝統の重みを全面的に背負いながら、さらなる民主主義、さらなる経済発展の可能性を模索しているのが、東アジア諸国・地域の一大特徴である。

——(猪口孝『日本』東京大学出版会、1993年、刊行にあたって)

四、例えば臺灣を旅行するとして、そこに私たちはどのような臺灣の文化を見ることになるのだろう。

飛行機から臺北の街に降り立つと、そこは目にも鮮やかな漢字の看板の氾濫を除けば、東京と全く変わらない超近代都市だ。街ではマクドナルドやケンタッキー・フライドチキン、サーティーワンといったおなじみの店に、「新人類」の若者たちが群れているのを見ることができるだろう。私たちがまずぶつかるのは、いわば無国籍の現代文化であるといってい。

——(松永正義など『臺灣百科』大修館書店、1990年、170頁)